

2022年9月 海外研修レポート(リーマン学会・施設見学)

当社では、古くから米国やヨーロッパへの海外研修を毎年行っていましたが、COVID-19の影響から3年間の空白が空いてしまいました。今回、改めて若い世代を中心に海外の情報を集めていこうという取り組みで、海外研修に出掛けました。

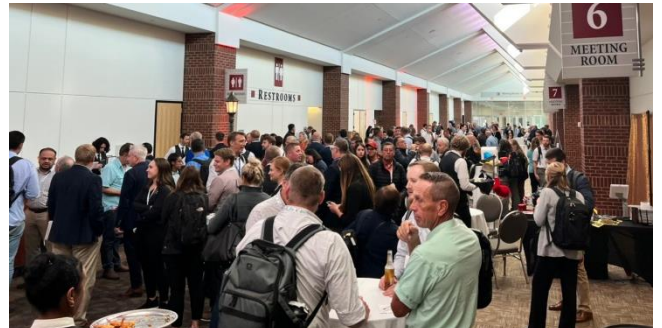
行程として9/17~20でミネアポリスにて開催されたリーマン学会、9/21~22でアイオワ州キオカクの近くのカーサージベテリナリーサービス(CVS)、9/23は当社でも出身者が多いアイオワ州立大学へ訪問してきました。



見渡す限りのトウモロコシ畑 (アイオワ州)

米国でのホットトピックスとしては母豚の事故率増加が挙げられていました。これについては高繁殖成績とアニマルウェルフェアの取り組みから、脱出症や足悪による死亡原因が報告されていました。米国から遺伝子資源として日本国内への輸入もあるので、今後国内でも同様の現象が起きないように注視したいテーマでした。

また防疫に関してもアフリカ豚熱・高病原性PRRS(1-4-4株)なども含めて、米国もより一層防疫強化に臨まれていた様子を肌で感じる事が出来ました。加えて、米国で行っていた情報の見える化・チームとしての取り組み・教育体制などは国内業界においても重要な取り組みと感じました。



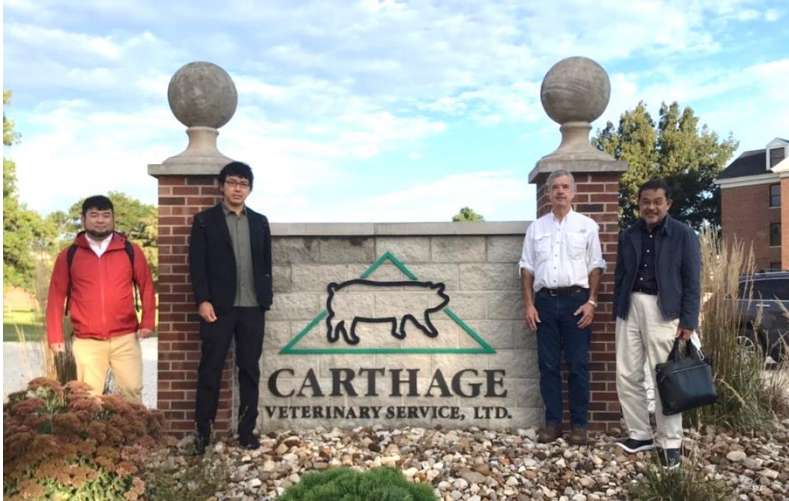
学会会場風景



ロー先生による研修設備の案内

CVSではジョセフ・コナー先生やアーロン・ロー先生に座学でCVSが考える米国の養豚のことを勉強させていただきました。また繁殖農場と肥育農場の実際の管理を見学させていただき、業務にも生きる気付きを得ました。

ISUでは、ジャスティン・ブラウン先生からSMC(養豚獣医学教育センター)のことについて教えてもらいました。こちらの研修に関しては過去当社の獣医師も参加したことがあります。



CVSにてコナー先生と記念撮影



ISU ジャスティン・ブラウン先生と記念撮影

研修行程以外にも空き時間に米国のスーパーマーケットなども視察し、米国の食肉文化の確認も楽しみました。米国の朝食のベーコンがカリカリに焼かれているのが不思議に思いましたが、過去に彼らの食文化の中で寄生虫が問題となった名残から、今も同じ食べ方が継続していると聞きました。歴史を感じますね。

また、今回訪れたアイオワ州は米国内でも有数のトウモロコシ生産地帯であり、養豚が非常に盛んな地域です。日本の面積の40%程のアイオワ州に日本の倍以上の頭数の豚がいると考え、改めて米国のスケールの違いに圧倒されます。

期間中様々な米国または他国の養豚関係者・獣医師たちと連絡先を交換することもできました。今回培った一期一会を大切に、連絡を継続し、養豚現場へ必要な情報を還元できるようパイプ役として、これからも社員一同頑張ります。



◀スーパーマーケット精肉売り場の風景（フレームに収まらない程ダイナミックに展開）

米国スーパーではインジェクションミートと呼ばれる味付け肉がBBQ用途で人気▼

